外見的魅力度が能力評価に及ぼす影響
—教員志望学生による子どもの能力評価の検討—

風間文寛
(十文字学園女子大学人間生活学部)

戸田(2011)は外見的魅力度が子どもの能力評価に及ぼす効果について、教育経験の有無によらず外見的魅力度の低い児童の方が高い児童よりも能力を高く評価されることを示した。本研究では、まず外見的魅力度が子どもの能力評価に及ぼす影響を確認し、あわせて評価者が教員志望者か否かによる影響を明らかにする。戸田(2011)は教育実習経験をした3年生以上と未経験の2年生以下とを比較した。大学2年生までは進路に関する意志がはっきりしていない学生も少なくないとと思われるため、進路がより現実的なものとなり、実際にそれに向けて準備を始める時期である大学3年生以上を対象に教員志望者と非志望者を比較する。

【方法】 調査対象者 埼玉県内の私立女子大学100名（平均年齢21.0歳、S.D=0.7）、教員志望者44名（44.0％）、非志望者56名（56.0％）で志望者全員が養護教諭志望であった。

刺激人物 小学校4年生3名の写真を使用した。

刺激文 小学生による作文を刺激文とした。内容は実験者らが作成し、文の間違い、誤字脱字より質の良悪を操作した。

質問項目 ①刺激人物の印象評定：「頭のよい頭の悪い」、「感じのよい感じる悪い」、「明るい暗い」、「積極的な消極的な」など20組の形容詞対について7件法で評定を求めた。②能力評価：「作文の内容」、り「文章構成」、「文章の表現」、「文章ののわかりやすさ」、「読む、読者のなさ」の5つの観点について、「1ととても悪い」～「7ととてもよい」の7段階で評価を求めた。

実験計画 外見的魅力度（高・低）×作文の質（良・悪）の2×2の実験参加者間計画とした。

実施時期と実施方法 2011年11月に授業時間の一部を用いて集団実施した。

【結果と考察】 外見的魅力度の操作チェック 外見的魅力度の高低群ごとに、因子分析によって抽出した増分量の3因子の平均尺度得点を算出し、検定を行った。その結果、個人的親しみやすさ(t(82)=6.9,p<.001)、社会的望ましさ(t(98)=3.6,p<.01)、活動性(t(98)=6.6,p<.001)とも外見的魅力度の操作どおりの有意差がみられた。

外見的魅力度と作文の質が能力評価に及ぼす影響

5つの各評価項目をそれぞれ合計した全体評価得点(α=.85)を従属変数とし、教員志望群と非志望群別に外見的魅力度（高・低）×作文の質（良・悪）の2×2の分散分析を行った。その結果、作文の内容、「文章構成」、「文章の表現」については教員志望群でみ、「作文のわかりやすさ」および「読む、読者のなさ」全体評価(図1)では教員志望群、非志望群とも作文の質の主効果がみられた。いずれも、良い作文の方が悪い作文よりも高い評価を受けていた。外見的魅力度の主効果と交互作用はいずれの変数でも有意ではなかった。

図1 各条件ごとの作文の全体評価

教員志望条件を満たして3名の刺激人物別に同様の二要因分散分析を行ったところ、刺激人物Cの「文章表現」(p<.05)、「読む読者」(p<.10)、全体評価(p<.10)において、外見的魅力度高群が低群よりも評価が高かったという主効果がみられた。一方、刺激人物Aの「文章構成」(p<.05)については逆に低群が高群よりも評価が高かった。

本研究は森本俊子さんと十文字学園女子大学人間生活学部に提出した卒業研究(2011)のデータを再分析したものである。